

# 万葉集古写本の本文改変

木 下 正 俊

## 一

元和偃武から二十八年後の寛永二十年十二月、京は三条寺町誓願寺前の安田十兵衛が万葉集の刊本、いわゆる寛永版本を刊行した。

これが近世万葉学発展の基となったのはよいが、残念ながら欠陥が多い本で、『万葉考』は「今本に錯乱・誤字甚多し」と言い、やや誇張した言い方をすれば、近世諸学者はこれのあら探しに終始した。少し意味の通りが悪いと、誤字だ、誤脱だ、衍字だ、顛倒だと言つてすぐ改めた。

しかしこのような疑いを抱いた学者達が上代語に関する十分な知識がないままに、後世人の歪んだ規準で判断したがために、結果的には余計な改悪・添削をし続けた嫌いがなくもない。今その具体例は省くし中には大いに従うべき説もあるが、『万葉考』に先立つ『万

葉代匠記』でさえも既に幾つかの誤字誤脱を試みている(三二・三四元など)。まして考以下の諸注はめいめい勝手な本文を捏造してその大部分は今日採るに足らぬ謬説と見なされている。これひとえに叩き台である版本がいかかわしそうに見えるために、本当は決して誤っていない本文さえも貽細工のように引き歪めてしまったのである。

確かに寛永版本に悪い所はある。例えば、活字附訓本まで「年魚市方塩干二家良之」(二五二)とあった「之」を「進」にするとか、「海上之其津乎指而」(二六〇)の「乎」を「於」にするとかの無意味な変改を冒している。その附訓本も活字無訓本の「因香跡思波牟」(四六三)を「因香爾……」とするとか、「可由既婆」を「可久由既婆」と直すとかしている。特に後者は植字工の賢しから出た意改の匂いがする。その無訓本も、それ以前の写本段階の「跟地」(二六元)「ツ

チヨフミ」を「踞他」と誤植し、これは附・寛に受け継がれた。

刊本でさえこんな風だから、写本の誤りはほとんど野放し状態と言つてよい。写本の誤りは大きく分けて

(i) 無意識の、言うなれば魯魚の誤り

(ii) 故意、即ち賢しらの意改

を二分できる。(i)の無意識は万葉に関して言えば魯魚ならぬ焉馬・鳥鳥の如き字形の似寄りに基づくものである。校本万葉集首巻の校異を示さざる異字一覽は、この類を載せたり載せなかったりで、必ずしもその境界は明らかでない。令―合、頃―頃、忌―忘、父―文など筆写の上では極めて紛らわしく、従つて校異に挙げられたり通用として採られなかったりする。しかし今はこの(i)については触れないでおこう。ただ、(ii)と紛らわしい例として、「逆副川之神母」(三元による)を「遊副川」とするとか、「社師怨焉」(四〇五紀による)を、焉・鳥の紛らわしさもあって「社師留焉」(次点)「社師留焉」(仙覚新点)などとすることがあった事実を挙げるにとどめよう。

## 二

(ii)については、私は以前「萬葉集写本の意改」(『文学』四八巻二号)で二十余例を示して述べた。今これから述べようとするこ

ろは、それ以後に気付いたことの拾遺でしかなく、鶏肋とも蛇足ともつかぬものであるが、敢えて前稿の一部を重ねて示すならば、

円方之湊之落鳥浪立巴妻唱立而近著毛(巻第七・二六)

ここには便宜上寛永版本の字面を以て本文を示した。以下もこれに倣う。これは元類紀宮細西などの諸本に「也」とあるのに従つてナミタチヤと読むべきところなのに、それに馴れなかったのか中古人が「なみたては」と読んだ仮名訓がまずあつて、これに悪しく同調した書写者が「也」を「巴」としたのである。これは「也」とある西本願寺本の関知しない意改であり、同じ文永本系であるが陽明本あたりに始まったものである。

それより年代的にやや古い意改例に、

假立天河原爾待君登伊往還程爾裳欄所治(巻第八・二五)

がある。この「程」の字は類紀になく、仙覚寛元本(宮細)及び文永本(西陽矢京など)に至つて加わつた。類紀が「程」の字を記さないままに「ゆきかふほとに」と読んでゐるのは当時の仮名訓をそのまま書いたのであるが、宮細西以下の諸本にはその仮名訓に合わせて「程」字を書き加えたのである。この犯人は恐らく仙覚その人であらう。

非仙覚本の筆者といえども賢しらをするところがある。

真野之浦乃与騰乃繼橋情由毛思哉妹之伊目爾之所見(巻第四・

四〇

この「由」が元金類には「田」となっている。訓は金類が「こゝろたも」、元「こゝろにも」(古今六帖同)とある。「由」の字が正しく書かれているのは古紀以下で、仙覚本はそれを受けている。助詞ダモはダニモの約で中古には珍しくないが、上代には例がない。これについて仙覚抄は、

此歌中五文字、証本皆同ク漢字ハ「情由毛」トカキテ、仮名ハ「心タモ」ト点セリ。又或本ニハ「田」ニカケリ。是ハ仮名ニヨリテカケルニヤ。「コ、ロユモ」ト云ハ古語也。(以下略)

といっている。この「是ハ仮名ニヨリテカケルニヤ」というのは私の考えを先取りしたものとして甚だ欣快である。

このように書写年代が古いからといって過信することは危険である。

天雲 近光而響神之見者恐不見者悲毛 (巻第七・二二六)

この第二句「近光而」が紀には「近走而」となっており、元では

天雲近光而

あまくものちかくひかりて

のように「光」(ひかり)が正式で、「走」が校異の形で書き入れられている。類も版本と同じく「近光而」(但し訓は「はてりて」)

とあって、全体的に「走」は影が薄い。西陽などの文永本も「光」を採っているが、その書入を見ると六条本(二条院御本)にも「走」とあったことが知られ、無視されるべき本文ではなさそうである。確かに光・走は筆順こそ異なれ草体ではよく似ており、先に挙げた(i)の魯魚の誤りと見られかねない。

しかし國語のハシルは疾走を意味する以前に破裂する、飛び散るなどの意であったこと、そして、これまで見てきたように、古写本筆者が仮名訓に合わせて本文を捏造する実例があることを思うとき、「走」とあるのがむしろ原本の姿ではなかったろうか。ハシルに炸裂する意があることを忘れ、草体で走・光が近いことを思っ

て中古人が原本の「走」を「光」に改めたに違いない。

次に述べるものは、小学館の日本古典文学全集本の段階では気付かず、同社の完訳日本の古典シリーズ本の中で直したものである。

潮 核延子菅不竊隠公恋乍有不勝鴨 (巻第十一・二四二)

この第五句「有不勝鴨」は、調べといい、用字法といい、どう見てもいかにも万葉集らしい。しかし偶然かも知れないが、「知りかてぬかも」「過ぎかてぬかも」「行きかてぬかも」などという例はあるが、「ありかてぬかも」はありそうに見えてない。その代りというべきか、「ありかつましじ」ならば藤原卿の「き響ずは遂にありかつましじ」(二四四)や「かくし待たえばかりかつましじ」(二四六)な

ど幾つかある。ただし中古人には上代語特有のマシジを理解できず、右の〔九四〕も「有勝麻之目」と意改（「麻之目」をマシモと解する）し、「有勝益士」〔七三〕を「ありかてましを」と読んだことについては橋本進吉博士の論文「『がてぬ』『がてまし』考」に詳しい。そしてこの「有勝勝鴨」もそれと同類の誤解修整の結果で、上代語法に多少明い誰かが「鴨」の字を書き加えたのでないか。

というのは、この巻第十一は元暦校本がごく一部を除いて残っていない、その代わり資料的に純度の高い嘉暦伝承本が、この巻に限って多量に現存する。その嘉暦本と古葉略類聚鈔とに最後の「鴨」の字がない。訓は仙覚本は勿論類古も肝腎の嘉暦本も「ありかてぬかも」となっている。嘉古二本が「鴨」を誤脱したということも考えられなくはないが、それよりも類以降の書き手が仮名訓に合わせて「鴨」の字を書き足したと考える方が自然であろう。

## 三

巻第一の中大兄三山歌（二三）の反歌で、その左註に「今案不似反歌也」と記された

渡津海乃豊旗雲爾伊理比沙之今夜乃月夜清明已曾（二三）

この歌は第五句の訓にも問題があるが、今はそれは措こう。これから取り上げようと思うのは第三句の本文である。校本万葉集によれ

ば、次の四種に分かれる。

- a 沙之 宮細無附
- b 佐之 紀及び秘府本
- c 弥之 元類
- d 祢之 冷西陽文矢京

近世以降諸注は版本の「沙之」を採って疑わず、殊更この本文を不審とする者はなかった。でも同じ仙覚本でありながら寛元本の宮細が「沙之」を採ったのに、西本願寺本など文永本系諸本は「祢之」に切り換えている。これについて後者と同時期に成った仙覚抄は

此哥中五文字ツネニハイリヒサシト点ズ。二条院御本ニ、イリヒネシト点ズ。漢字スデニ祢ナリ。尤入日ネシト点ズベシ。就中イリヒサシトイヘルハ其心オホヤウ也。ネシトイフハヤハラ  
グト云コトバナレバ、入日ヤハラヒテハ、可風暗天。コト殊  
ニソノイハレアヒカナヘル也。

と言っている。ネシがヤハラグ意というのは音義説めて信じ難いが、二条院御本に「イリヒネシ」と読んでいるというのはdの冷泉本（お茶の水図書館蔵本では偶がいびつ）と合致し、西本願寺本以下の文永本はこれを可として採用したものであり、仙覚の意改ではない。

だが、このd「祢之」はc「弥之」の誤写であろう。元類の「弥

之」は万葉集原本の姿を正しく伝えたものと言つてよからう。論拠はあと回しにするが、「弥之」を採るものに武田祐吉博士の全註釈と古典大系本とがある。武田博士も定本万葉集の段階では慎重を期してd「弥之」を採っているが、全註釈においてc「弥之」を採用した。書写年代が古く資料的価値が高い元類二本に「弥之」とあることは尊重せらるべきだ、というのがその理由であり、大系本もまたこれに同じた。

その後沢瀉博士は論文「豊旗雲に入日さし」(『萬葉古径』三所収)でこの問題を正式に取り上げ、注釈において重ねて脱かれた。博士はサシを古い訓と見、「紗之」が原形で「弥」も「紗」からの誤写、草体になるとその可能性は十分に認められる、と言われる。博士は元類の「弥」に注意されながら、これら二本の仮名訓に「いりひさし」とあることを重視し、袖中抄・綺語抄・夫木抄などの抄本もまた「いりひさし」とあることを強調される。しかし先にも挙げた前稿「萬葉集写本の意改」に列挙した諸例から導かれた私の考えは、中古の歌人歌学者達がそれなりに鋭い勘で附けた仮名訓が過信され、それによって本文を歪めるといふ図式が一般的だ、ということであつた。訓に合わせて本文を捏造することがあるとすれば、折角ながらこの歌のサシは従い難いことになる。

このサシかミシかを決するためにはコヨヒの語義について十分考

慮することが先決であらう。沢瀉博士は注釈の中で、

(上略)「入日見し今夜」といふ言葉は、事実として少しをかしいのではなからうか。「入日見し今夜」といふ事は入日を見た日の夜といふ事では無くて、入日を今夜見たといふ事になるからである。「ゆふ」「ゆふべ」といふ言葉は昔も今も日ぐれ頃にも用ゐるが、宵といふのは今もその時間には用ゐない。

(下略)

と言われる。しかし今と昔とで一日の開始が違つてゐることは今日では周知のことである。これについては大系本『今昔物語』第二冊補注三〇ページ及び同『平家物語』下補注三〇ページに詳しく記されており、委細はそれらに譲るが、要するに同じコヨヒでも、今日と同じくこれから起るべきことにかかり助動詞ムと対応するものがある一方、現在より前に遡つた昨晚のことにかかり助動詞ツと応ずるものがある。これは一日の起算の仕方に

第一 今日と同じく夜半午前零時を以て一日の始まりとする方法  
(古代エジプト人方式、日本でも天智天皇の代にこの式が  
伝来)<sup>注1</sup>

第二 日出を以て一日の始めとする(古代カルデア人方式)

第三 日没を以て一日の始めとする(古代トルコ人等回教圏の方  
式)

の三通りがあり、日本でも民衆生活では第二・第三の両方式によっていたと思われる。さればこそ『古事記』山幸海宮訪問の段に「三年座せども恒は嘆かすこともなかりしに、今夜大きな嘆きしたまひき」とあったり、逸文『摂津国風土記』に「今夜夢に吾が背に雪降り置けりと見き」とあったりする。これらは第三方式によっていたからと考えられる。コヨヒではないが、万葉集にも、

高麗錦紐の片方ぞ床に落ちにける 明日の夜し来なむと言はば  
取り置きて待たむ（巻第十一・三三六）

明日の宵逢はざらめやもあしひきの山彦とよめ呼び立て鳴くも

（巻第九・二六三）

などの「明日の夜」「明日の宵」は今日の習慣で言えばコンヤであり、第三方式によっている。因みに言えば、

玉かぎる昨日の夕見しものを今日の朝に恋ふべきものか（巻第

十一・三三六）

は第二方式により日出時を起点としている。

このように考えると「入日見し今夜」という表現は少しも不自然でない。なお語の続きに足らわぬものを感ずるかも知れない人のために贅言するならば、「枕片去る（夜の）夢に見え来し」（六三三）「娘子等がさ寝す（屋の）板戸を」（八四四）などを示し、こども「たった今の」の如きを補えばよいのでなかろうか。

同じ巻第一の終り近く、元明天皇の御製「ますらをの鞆の音すなりもののよの大臣楯立つらしも」（三七）に和してその同母姉御名部皇女が

吾大王物莫御念須壳神乃嗣而賜流吾莫勿久爾（三七）

と詠まれた。寛永版本の訓をそのまま写したため特に第五句が意味不通であるが、今はそれには触れない。今日の注釈書でこの「嗣而」を採らないものはなく、従ってツギテと読まない者はいない。このタマヘルは勅詞としての用法で、その主語は皇神（スメカミは正しくは「志賀の皇神」「住吉の我が皇神」のように地主神を意味するが、ここは皇祖神の意）でなければならぬ。その皇神が誰に何をツギテ賜うたというのであろうか。一つには、この歌の下三句がネクス（主・述関係）形式でなくジャンクション（修飾・被修飾の関係）形式であるために分かりにくくなっているのである。また、第五句の「吾」は「吾を」の格か「吾に」の格か、後者とすれば皇神は何を賜うたというのであろうか。そしてツギテは何が何に次ぎてなのか。これら複雑に絡んだ問題に対する解釈を代匠記以下近代まで研究史的に整理してここに記するのは容易でないが、仮に考の「爾々に依し賜へる天皇の御位ぞ」や宜長の、「吾」は「君」の誤り、とする説、新考の「吾につぎて蒼生にたまへる」とする新奇だが従い難い案を除けば、

講義 御名部皇女が生命を賜わったの意。ツグは吾が嗣ぐで、天

皇に副次としてこの世に命を賜うたということである。

(要約、以下同じ)

全註釈 天皇に続きて(天皇の副人として)皇神の下し賜うたとい

うこと。但し神田本(紀州本のこと)と金沢文庫本には「嗣」を「副」に作っており、これによればソヘタマヘルとなる。「嗣」と「副」とはしばしば混同しているのでは非を定め難い。

注釈 菊地寿人氏の『万葉集精考』に「君に次ぎて吾をも下し給

へる義。『君に次ぎて』とは『君の御護りとして、御輔佐として』の意」とされるのが最も優れている。紀文に「副」とあり(冷も同類か)、「副而」ならば天皇の「副人」としての意となるが、紀にも訓はやはりツキテとあるので「嗣」を採る。

といった考えが最もよく案じた所と言ってよい。

話は先後するが、校本万葉集を見ると、全註釈・注釈が既に注意しているように、

嗣 元類宮細西陽矢京無附

副 冷(お茶の水図書館本は「制」に似た字だが、同系統一本によれば明らかに「副」)紀文

の二通りがある。そして訓は諸本一致して「ツキテ」となっている。このような時、これまで見てきたように、訓がまず定まって本文がそれに合わせるように改められるのが通例であるから、注釈が「副而」に作る本もあることに注意しながら訓に「ツキテ」とあることを理由に却けて「嗣而」を採られたのは、私の方法とは方向が逆である。

全註釈も指摘するように嗣・副は互いに書き誤られることが多く、校本首巻の「校異を出さざる異体字ならびに通用字の表」(武田博士の作成)に両字それぞれ異体字を示してあり、ここにそれを模し作字してまで載せることは省略するが、双方共旁は混淆せずただ「嗣」の左側が「副」のそれと一致乃至類似することがある点だけ告げるに留めよう。改めて言うまでもなく私は「副而」を原形と認め、このタマフは皇神が元明天皇に賜うたのだと思う。大系本及び新潮社の集成本がツギテと読みながら、

大君に副えて生命を賜わった(大系本)

大君にそえてこの世に下し賜った(集成本)

と解釈しているのは、「何を」賜うたかに不十分な点が感ぜられるものの、私の「副而」説の先蹤をなすものとして敬意を表したい。先の「入目見し」では元類に従い、「副へて」では冷紀を採って元類を捨てたが、古写本や注釈書と付き合うには向背常ならぬ是非

々主義こそ正道である。

なお、先の全集本で私達は「嗣而」を採って

○過ぎて賜へるーツギテは継ギ手か。継ギ手の語ならば後継ぎの意。御名部皇女と高市皇子との間の子、長屋王は当時三十三歳（懷風藻による）に達していた。一方文武天皇の遺児首皇子（後の聖武）はまだ八歳にすぎなかったので、長屋王は皇位継承者としても有力な位置にあった。御名部皇女がこの歌を詠んで女帝を力づけた背後にはそのような男子を持った親としての自負が感じられる。首皇子が即位して後、長屋王は無実の罪で自縊させられた。

とした、これは私注の「ツギタマヘルの意と見えるがテの用法特殊であるから、なほ考究すべきであらうと思ふ」という考えに添って表記を二次的なものと解する立場に拠ったものであるが、私はこれを改めたい。

#### 四

これまで私が述べたのは、「入日見し今夜」といい、「副へて賜へる吾」といい、前稿「萬葉集写本の意改」の二番煎じというべきもので共に些細な問題のあげつらいであったが、結果的には心ならずも先師沢瀉博士の御説に対する反駁となった。まだこれ以後にも

これに類する批判的本文溯源を試みるかも知れない。

しかしこの細々とした方法らしきものは、実は私の独創ではなく、沢瀉博士が既に『萬葉古径』三冊及び『萬葉歌人の誕生』など御著書に収められた論文の中に幾つか明示されたところを模倣し、私なりに小細工を加えたに過ぎない。

その一例を私がこれまで試みた形に置き換えて示すならば、古径三の「七日し零らば七日来じとや」である。この歌は寛永版本によれば、

春雨爾衣甚將通哉 七日四零者七夜不来哉（巻第十・二五七）

とあり、第五句「七夜」の所が元類紀に「七日」となっている。類紀は訓も「なぬか」「ナヌカ」とあるが、元の訓は「ななゝよ」とあって本文と一致していない。博士の示されたところを借りるならば、赤人集・古今六帖・夫木抄・桐火桶などの抄出本類にも「ななよ」となっている。本文「七夜」訓「ナ、ヨ」と寛永版本と同じ形になったのは校本に見る限り、宮細西陽矢原などの仙覚本に限られ、これだけから見ると仙覚が意改したもののよう疑われても仕方がない。<sup>注2</sup>

このような事実に対して博士は、

（上略）元暦校本と名のみことごとしいが、その訓み下しの方は筆写当時の伝誦歌の書入で、まことにたわいないものであ



る。このたわいのないかながきによって、本文の「七日」を「七夜」の誤と断ずるは全く本末顛倒の甚しきものと云ふべきであらう。これを同じく本文「七日」とある紀州本の訓

ハルサメニコロモハイタクトホラメヤナスカシフラハナヌカ  
コシトヤ

とあるものと比較する時、いづれを重んずべきか、愚半に過ぎむ。(下略)

と言われている。書写年代が古いからというだけでその本文を尊重すべきでないということも私にはありがたい御教示であり、それをも今も学生達に、どんな写本(版本)にも誤りがあるが、どんな本にもどこか良い所がある、注釈書・学書・学者の言についても同じように必ず欠点・長所があるものだ、とつねづね受け売りして伝えている。

なお、これの他にも、

春日野大鷲 鳴別 咎 益間思 御吾 (同・二六〇)

について書かれた古径二の「『春日野』か『春山』か」や、その結論には従えないものの、『萬葉歌人の誕生』所収の「清江乃木笑(乃松原)も方法的には同じものが見られ、それらに導かれ触発されてまだ私は摸索を続けているところである。

注1 (五ページ) 夜半午前零時を以て一日の始まりとすることが、日本では天智天皇の代に始まったというのは、漏刻の発明と関係がある。この漏刻の発明は天智天皇代最後の天智十年四月十五日に記事があるが、これには「此の漏刻は天皇の皇太子にまします時に、始めて親ら製造れる所なりと、云々」という注記があり、それは十一年前の斉明六年五月の条に、皇太子(天智)が初めて漏刻を造られた、とあるのをさすと思われる。その中大兄の「三山歌」製作時期は明らかでないが、その反歌で「入り見し今夜の月夜」と詠んだ人が漏刻の発明者でもあることは興味深い。しかしそれによってその中のコヨヒのさす内容が大きく変わるとは考えられない。

注2 (八ページ) 冷泉本系一本で、校本万葉集の校合に用いられたお茶の水図書館蔵本(巻第一の大半のみ)より由緒正しいと思われる本を見出したことがあるが、それには、

春爾衣甚將通哉七日四零者七夜不来哉

ハルサメニコ、ロハキミモシレルラムナヌカシフラハナ、  
ヨコシトヤ

となっている。これは言うまでもなく非仙覚本でありながら「七夜」とあることを示すもので、それから中古において既に「七日」から「七夜」に意改がなされていたことが知られる。

(平成二年八月二十日)